

1840年代におけるマルクス・エンゲルスの 価値論の展開について

深 澤 竜 人

はじめに

カール・マルクス（1818～83年）とフリードリッヒ・エンゲルス（1820～95年）が著作を開始していくのは、1840年代のことである。本稿ではその1840年代を対象を絞り、その時期における彼らの価値論について論及していく。

まず背景や状況を解りやすくするため、最初に1800年代前半までの価値論に関して、整理と概説を簡単に示しておく。本稿での論及と関係する限りでは、以下のとおりとなる⁽¹⁾。

①. 商品の価値を、その生産に費やされた労働の視点から見ていくという労働価値説的な考えは、古来アリストテレスの頃より存在していた。それを今日言うところの労働価値説として大成させていったのは、マルクスと言えよう。しかし、その源流を訪ねていくと、経済学の父と言われるアダム・スミス（1723～90年）をさかのぼること遥か100年、ウィリアム・ペティ（1623～87年）に求められる。

②. ペティが示した労働価値説の萌芽としては、次の点が特筆される。

②-1. 従来の重商主義・重金主義・貿易差額主義的な考え・政策から脱し、生産面における生産的労働こそが創造的な働きをするのであって、それが富を生み出す機能を有していること。

②-2. それを基に、さらに交換面において投下労働量を基準とした等価交換の論理を示したこと。これらである。

③. ②-1に関しては、後にフランソワ・ケネー（1694～1774年）において、さらに詳細

に提示されてくる。加えてケネーにおいて特筆すべきは、上記の点以上に、一国内における再生産と循環の重要性を特に重視し、そこから農業の存在意義と重要性を説いた点にある。

④. 上記①から③の点はやがて、アダム・スミスに継承され、彼の著作『国富論』（別名『諸国民の富』（1776年））においてまとめられていく。

⑤. さらにその後は先のマルクスによって受け継がれ展開され、理論的に体系化されていくのだが、そのマルクスに至る前、アダム・スミスがまとめた労働価値説に関して、その直後、デヴィット・リカード（1772～1823年）とトマス・ロバート・マルサス（1766～1834年）による両者の間で、論争を交えながら発展され展開されていく。

⑤-1. リカードは、商品を生産する際に必要とされ投下・投入された労働、これに商品の交換価値を見る見解を提示した。このリカードの説は、後に労働価値説の中で別名「投下労働価値説」と単純に呼び慣わされていく⁽²⁾。

⑤-2. これに対してマルサスは、生産された商品がその後交換される際に支配・獲得できる労働、これに交換価値を求める説を打ち出した。「生産された商品が交換の際支配・獲得できる他の商品生産の労働」とは、簡単に言えばその商品が有する「購買力」のことであって、この説は後に労働価値説の中で別名、「支配労働価値説」と単純に呼び慣わされていく⁽³⁾。

⑥. このように、一口に労働価値説と言っても、リカードとマルサスらの間で違った説が提

示されており、その他にも当時いろいろな価値論があったわけで、1800 年代の前半において価値論はこのように錯綜していた。

さてアダム・スミス亡き後、そしてまたリカードとマルサスも亡き後、労働価値説として理論を体系化し大成させていったのは、既述のとおりマルクスであった。それは彼の（またはエンゲルスとの共同作業とも言われる）『経済学批判』（1859 年）や『資本論』（1867-90 年）、これらの著作において大成されていく。そのマルクス（またエンゲルス）の場合、彼らの価値論を見た場合、それは言わずと知れたように、マルサス提唱の支配労働価値説の立場に立つものではなかった。上記あえて分類した労働価値説の種類と系譜からすれば、それはリカードが提示した投下労働価値説、これに沿ったものであり、マルクスはその立場に立って理論を精緻化し論理立てていったこととなる。

そのマルクスの価値論を若干見ていくと、商品の価値の実体を最終的に、商品の中に共有物として含まれている抽象的人間的労働、これに蒸留し還元するという方法を取りながら、商品の価値の大きさをその生産に有する社会的必要労働時間、これに求めていった。（Marx [1867-90] 第一篇 第一章 第一節。）

これは既述の労働価値説の系譜と分類からすれば、明らかにリカード提唱の投下労働価値説の立場に拠るものであって、マルサスの支配労働価値説に拠るものではない。

以上ここまでの展開の中で、次の点が問題として考えさせられる。マルクス・エンゲルスが著作を始めた 1840 年代、錯綜する価値論の中、当時期における彼らの価値に関する論理は、先ず最初一体どのようなものであったのか。さらにまた、そうした錯綜する価値論の中でなぜマルクス（及びエンゲルス）にあっては、後に『資本論』などで大成し展開していく投下労働価値説の方を受け入れて、その他の支配労働価値説

などの価値論を受け入れずに、論理を展開していったのか。このような問題である。

さらに言えば、彼らが投下労働価値説に、いわゆる有効性・有意義性を見た理由は何であったのか。彼らの経済学、あるいは広く後に「マルクス主義」と言われる学問体系の中で、投下労働価値説はいかなる関連性と連携を持ち、どのような整合性を有していたのか。

これらの点を本稿における対象課題として、以下追究していくこととしたい。

第 1 節 マルクス・エンゲルスの初期の価値論

1. マルクス・エンゲルスの初期の著作に関して

まず、マルクス・エンゲルスが経済問題に関心を持つ・持たないに関わらず、執筆を開始していくのが、既述のようにおよそ 1940 年代である（以下、表 1 を参照）。

ちなみに、表 1 に挙げた以外の著作でも、マルクス・エンゲルスの初期の著作にあたっすぐ解することは、①. エンゲルスの方が早くから経済問題について関心を寄せていたこと。②. 一方マルクスの初期の文献では、文学的あるいは哲学的な内容のものが多くこと。これらである。それに関しては、おそらく両者の出自や経歴の違いが反映されていることからであろう。（エンゲルスは工場主の子息という出身。一方マルクスは、ヘーゲル左派の学徒出身。）

そしてさらに③として、エンゲルスは当時のヨーロッパにおける労働者階級の悲惨な状況、（例えば工場労働者の過酷な労働条件・労働環境、その下での労働者の退廃的な状況、劣悪な健康状態、周期的に襲う経済恐慌、その下での失業の憂き目とその悲惨な状況など）に早くから着目して、それを詳解している。そしてさらに、すでに当時の社会運動（特には社会主義運動、共産主義運動）について深く研究し言及し

表 1. マルクスとエンゲルスの 1840 年代ごろの代表的な著作
(著述開始から 1848 年の『共産党宣言』まで)

年	マルクス (1818 年生まれ)	エンゲルス (1820 年生まれ)
1839 年		「ヴッパータールだより」
1842 年	11 月後半において両者の最初の邂逅。	
		「国内危機」 「イギリスにおける労働者階級の状態」(『ライン新聞』第 359 号に掲載されたもので、同名の有名な 1845 年の書籍のものではない。)
1843 年		「ロンドンだより」
		「大陸における社会改革の進展」
1844 年	「ユダヤ人問題によせて」 「ヘーゲル法哲学批判序節」 「ジェームズ・ミル著『政治経済学要綱』(J・T・パリゾ訳、パリ、1823 年)からの抜粋」 「経済学・哲学手稿」	「国民経済学批判大綱」
	2 月末に両者による文通が始まる。 この年 8 月にも両者会見。 以後、親交を結び、以下のような共同の著作が行なわれる。	
1845 年	『聖家族』	
	「フォイエルバッハにかんするテーゼ」	『イギリスにおける労働者階級の状態』
	「ドイツ・イデオロギー」(～1846 年にかけて執筆。)	
1847 年	『哲学の貧困』 「賃労働と資本」の講義 (1849 年に『新ライン新聞』に発表、1891 年にエンゲルスの編集で発行。)	「共産主義の原理」
1848 年	『共産党宣言』	

(資料出所：大内・細川 [1959-75] より。)

ている⁽⁴⁾。こうした研究と著作の中で、エンゲルスは早くも次のような言明を行なっている。
「こうして、ヨーロッパの三大文明国すなわちイギリスとフランスとドイツはすべて、財産の共有制を基礎として社会的諸関係を徹底的に変革することが、いまや切迫したさげがたい必然性となったという結論に到達したのである。」(Engels [1843 b] S.480./523 ページ⁽⁵⁾)と、このように早くから、財産の共有制を基礎としたいわゆる社会主義・共産主義による社会の変革を、必然性という表現をもって訴えている。こうした主張は、本稿で対象としている 1840

年代において一貫して継続していく。

当時の社会主義運動・共産主義運動については、エンゲルスの当該期の著作がかなり詳しいため本稿では割愛するとして、本節ではマルクス・エンゲルスの著作と論述の推移に関して把握しながら、特に本稿での対象とした価値論に関して、両者の著作と分析に以下入っていく。

2. マルクス・エンゲルスの初期の価値論 その 1. 1844 年頃まで

この価値論に関しては、既述のように、マルクス・エンゲルスが執筆活動を始めた 1840 年

代当時、すでにリカードやマルサスその他にも様々な論が提示されていて、錯綜していた。こうした状況を念頭に置きながら、表1に示した彼らの初期の代表的な著作から、まず価値論に関するものに絞って、それにあたっていく。

その第一は何と言っても、エンゲルスの「国民経済学批判大綱」（1844 年）である。この著作から彼ら二人の経済学研究は始まる、と言っても過言ではないであろう。この「国民経済学批判大綱」において、エンゲルスは今までのあるいは同時代の経済学、及び様々な代表的経済学者にあたり、それら・彼らを喝破している。

エンゲルスの批判は凄まじいところがあるのだが、それはおくとして、ここで最重要事項として認識しておくべきことは、本稿で対象課題としている価値論に関して、エンゲルの主張は今日我々が認識しているマルクス・エンゲルスの価値論また労働価値説、つまり『資本論』他で示された既述の価値論とは、かなりかけ離れていることである。それはマルクスにあっても同様である⁽⁶⁾。

この点に関して、まずエンゲルスの主張から聞こう。

「対立物を操作する経済学者は、当然また二重の価値をもっている。すなわち抽象価値または真実価値と交換価値とである。真実価値の本質については、生産費を真実価値の本質と規定したイギリス人〔リカードやマカロック〕と、この価値を物の効用によってはかることを主張したフランス人セーとのあいだに、ながい論争があった。この論争は、今世紀〔1800 年代〕のはじめ以来つづいてきたが、そのままになってしまっていて、解決されていない。経済学者はなにも解決できないのである。」（Engels [1844] S.505./549 ページ。語句の強調は原文〔以下同じ〕。）

「この混乱を解明してみよう。物の価値は両要素をふくんでいるのに、これらの要素は、論

争の当事者によってむりやりに分離され、しかもわれわれがみたように、それが不成功におわっているのである。価値とは、生産費と効用との関係である。価値の最初の適用は、ある物を総じて生産すべきかどうか、すなわち、その物の効用は生産費をつぐなうかどうかという問題を解決することである。ついではじめて、価値を交換に適用することが問題になることができる。二つの物の生産費がひとしいなら、それらの物の比較上の価値をきめるために決定的な契機となるものは効用であろう。」（Engels [1844] S.507./551 ページ。）

一読して解る様に、この主張・論法は完全に効用価値説に近い。あるいは効用価値説そのものであるとも言えるであろう。上に挙げた文章の中には、後にマルクス・エンゲルスが到達し完成させていく労働価値説の、その労働という一文字もない。わずかに生産または生産費という言葉があるだけである。生産面における労働に価値を見るといった、後にマルクス・エンゲルスが到達し完成させていった労働価値説とは、程遠いものである。

マルクスはこのエンゲル執筆の「国民経済学批判大綱」を読んで、評価している。（マルクス [1844 b] S.468./387～388 ページ。）そのマルクスにおいても、初期の文献（「ジェームズ・ミル著『政治経済学要綱』〔J・T・パリゾ訳、パリ、1823 年〕からの抜粋」〔1844 年〕）において、価値論に関しては、例えば、

「生産費が価値を決定する唯一の契機だと述べたときと同様に、ミルは、抽象的な法則を述べて、この法則の不断の変化や不断の揚期〔中略〕を無視するという、一般にリカード学派に共通する誤りをおかしている。〔中略〕価値と生産費とはなんの必然的な関係ももっていない。」（Marx [1844a] S.445./363 ページ。）と、このように述べ、ミルやリカード（学派）を批判しており、後に依拠するところとなるリカー

ト提起の投下労働価値説には、注意を寄せている向きはない。

3. マルクス・エンゲルスの初期の価値論 その2. 1845年の『聖家族』

誰・彼に関わらず、研究を続けていけば思索や見解は進展し発展していくものであるから、その中で得られてくる見解や主張も、初期のものとは違ってくる。このことはよくあるケースであろう。マルクスやエンゲルスの場合も例外ではない。上記のように、エンゲルスにおいては効用価値説よりも見られる見解、マルクスにおいてもリカード批判と投下労働価値説に依拠していないような見解であったのが、その後1840年代の後半、特には1847年頃の著作から、かなりの発展や転換が見られてくる。

その発展と転換は次の項で詳述するとして、その前にマルクスとエンゲルスの両者で書かれた『聖家族』（1845年）において、以下の言明がなされている。これは彼らの上記（1840年代前半）から、下記（1840年代後半）にかけての思索の発展・転換にとって、その中間項や架け橋になるものとして興味深い。

「価値は、はじめは、その物の生産費と社会的効用によって、見たところ合理的にさだめられる。あとになって、価値は純偶然的な規定であって、生産費にたいしても、社会的効用にたいしても、いっこう比例しなくともよいものだということがわかる。」（Marx-Engels [1845] S.33./29ページ。）

「直接に物質的な生産についていえば、あるものを生産すべきであるか否かの決定、つまりそのものの価値についての決定は、実質的にはその生産に費やされる労働時間にかかるのである。なぜなら、社会が人間的に発達をとげる時間をもっているかどうかは、時間にかかっているからである。」（Marx-Engels [1845] S.52./48ページ。）

と、このように労働時間による価値の決定という、後に彼らの経済学の主要命題になる主張が、この時になされている。それはおそらく、この文献において初めてであろう。

しかし、彼らの価値論はこうした理解や論理をそのまま単純に延長させ発展させていったとは、とても言いがたい。それはさらに以下の著作を見ていけば理解できる。

4. マルクス・エンゲルスの初期の価値論 その3. 1847年頃またそれ以降

①『哲学の貧困』

価値論に関してマルクス及びエンゲルスのその後の発展と展開は、まず1847年刊行された『哲学の貧困』において、鮮明に見ることができる。この著作においては、上記見たような1844年段階の価値論とは、かなり違う見解が示されてくるのである。

マルクス著作の『哲学の貧困』（1847年）とは、社会主義者ブルードンの著作『経済的諸矛盾の体系、別名貧困の哲学』（1846年）への批判的著作である。この著作は、直接はマルクスによるブルードンへの批判がなされているものであるが、そのブルードンへの批判を行なう際、マルクスはリカードの労働価値説他を多く引き合いに出し、同時に詳解している。（例えばMarx [1847] S.106./106ページ、S.113-/114ページ以降。）そして、それに基づいて、ブルードンに対して批判を行なっているのである。

そしてまた、この『哲学の貧困』には、後にマルクスの価値論として登場してくる主要な命題、その片鱗がこの当時見え出してくる。例えば、

「労働は、売買されるかぎり、それ自体が商品である。なぜ人は労働を買うのであるか？『価値がそのなかに可能的にふくまれていると考えられるからだ』」。（Marx [1847] S.89./87ページ。）

「供給と需要とが均衡を保っている場合には、任意の一生産物の相対価値は、その生産物のなかに固定されている労働の分量量によって正確に決定される。」(Marx [1847] S.90./88 ページ。)

「価値を決定するのは、一つの物の生産に要した時間ではけっしてなくて、この物が生産される時間の最小限であり、この最小限は競争によって確定される、ということが、特に強調されなければならない。」(Marx [1847] S.95./94 ページ。)

この『哲学の貧困』はマルクスによって当初フランス語で書かれたのだが、後にドイツ語に訳されたものが1885年に出版される。その際に、エンゲルスが序文を記している。さらにそのエンゲルスは、『哲学の貧困』に注を入れ、次のように示している。

「労働力の『自然』価格すなわち正常価格は、賃金の最低限に、すなわち労働者の生存と繁殖とのために絶対に必要な生活手段の等価に、一致する—という命題は、『経済学批判大綱』（独仏年誌、パリ、一八四四年）および『イギリスにおける労働者階級の状態』[一八四五年]において私によってはじめて樹立されたものである。ここに見られるように、当時マルクスはこの命題を容認していた。[中略]『資本論』においてマルクスは、右の命題を正しくたてなおす（労働力の売買の項）とともに、労働力の価格をますますその価値以下におし下げることを経済制生産に許容する諸事情を展開したのである。」(Marx [1847] S.83./84 ページ。)

と、このように、後にマルクス経済学の主要部分をなす労働力の価値、それによる投下労働量の等価交換、これらがすでにこの著作から見られてくるのである。

しかし、この当時においては、上記二つの事項と関連したさらなる主要命題、労働と労働力の峻別、また必要労働と剰余労働との峻別、これらはまだ見られていない。

②「賃労働と資本」（1847-49年）

その後、同年の1847年の末、マルクスはベルギーのブリュッセルのドイツ人労働者協会で、労働者のために経済学の講義を行なった。それが後に「賃労働と資本」として、まず1849年に『新ライン新聞』（4月5日号以降）に論文として連載される。ちなみに我々が現行読んでいる『賃労働と資本』は、さらにその後、1891年にエンゲルスによって刊行された新版である⁽⁷⁾。このように現行版の『賃労働と資本』はエンゲルス編集によるもので、ただ、エンゲルスが言うには、「これは、マルクスが一八四九年に書いたままのパンフレットではなくて、ほぼ彼が一八九一年にはこう書いたはずと思われるパンフレットである。」(Engels [1891] S.594./579 ページ。)との一言がある。

このように、現行版の『賃労働と資本』は1847年当時のもとは幾分違うのであるが、1847-49年段階の「賃労働と資本」には、マルクス経済学の有名な諸命題、つまり資本家による労働力の購入、つまり労働と労働力の峻別、労働力の価値、これらの原型が見られる。(Marx [1849] S.398-/394 ページ以降。)

ただし、必要労働・剰余労働の峻別、これもまたマルクス経済学の有名な諸命題であるが、そうした表現や語句ははまだ見られていない。

③「共産主義者の原理」（1847年）、『共産党宣言』（1848年）

この1847-48年という年は、マルクス・エンゲルスにおいてさらに有名な著作が出されてくる。エンゲルスによる「共産主義者の原理」(1847年)、そしてマルクスとエンゲルスの共著による『共産党宣言』(1848年)がそれである。

『共産党宣言』の方では、マルクス経済学に関する上記の諸命題と関連した内容や、また価値論に関しての内容は、特に見当たらない。しかし、「共産主義者の原理」においては、労働

力の商品化、労働力の生産費、その必要な生活資料、その賃金としての等価、これらの指摘がなされている。(Engels [1847] S.365./382-383 ページ。)

ただ前述のとおり、この時期にはまだ必要労働・剰余労働の峻別、という論理や表現や語句は見られない。

この二つの著作においては、以上の分析ツールよりも、重点は結局次の訴えを主張するところとなっている。すなわち、ブルジョアジーの支配の発生、プロレタリアートの過酷な状況、恐慌の発生とその結果、新しい社会制度の希求、そのために具体的に求められる方策として競争の廃止、私的所有の廃止、などが訴えられている。

5. 本節のまとめと次節への課題

以上 1840 年代の段階におけるマルクス・エンゲルスの価値論の状況を原典から確認してきた。それらをここで次節への架け橋として、簡単に再確認してまとめておくとするれば、次のとおりである。

マルクスが後に『資本論』他で確立させていく彼の経済学の主要命題や諸要素、その原型は、1840 年代の後半から伺えられるということになる。さらに、細かく年代と著作を特定しておくとするれば、特には 1847 年の『哲学の貧困』以降となる。

しかし問題として、本稿はじめにでも投げかけたのだが、なぜおよそ 1840 年代後半の時期を境に、マルクス及びエンゲルスは今で言うところの「投下労働価値説」に傾斜していったのであろうか。当時の経済学の状況からして、価値論そして労働価値説においてもすでに様々な説が提示されていたことは、本稿ですでに述べておいた。そのように錯綜する価値論の中で、なぜマルクス・エンゲルスは、当初注意を払っていなかったとも見られる投下労働価値説を撰

取し展開していったのか。別な表現をもって言えば、上記見たように、1844 年頃においては、労働による生産、及び労働に価値を見る、これらの視点にさほど意識を払っていたとは見られないのだが、しかしその後の 1847 年以降となると、非常に投下労働価値説に傾斜していくのは、一体いかなる要因があつてのことであろうか。

この問題は片付いていない。それについて、節を改めて検討していくこととする。

第2節 従来の経済学、唯物史観、投下労働価値説、これらの融合

上記の問題に関して、筆者（深澤）においては、マルクス・エンゲルスの著作の中に明確なまた完璧な言質・言明を見ることは、未だできていない。あるいは、彼らの著作の中からそれを見出すことは不可能かもしれない。このため、彼らの著作から二人の思想遍歴・思索過程などを追いかけて、それらから検討して導き出していくしか方途はないと考えられる。

このような追究から、上記の問題に関して、筆者（深澤）は以下のように把握している。

1. 従来の経済学との関連（特に労働の創造性・有意義性に関して）

筆者（深澤）の検討からすると、まず第一に認識しておかなければならない事項は、次である。

マルクス・エンゲルスよりさらに以前の経済学を振り返れば、ペティ以来の経済学においては、次の点が重要視されていた。それは、本稿冒頭にも簡潔に示しておいたのだが、富の源泉に関して重要なことは、単なる商品交換・売買による差額代金の取得ではなく、一国経済における生産活動の有意義性である。さらにその生産を行なう際、労働が有している創造的な働き、

それを重要視するという観点である。本稿冒頭で筆者が、「労働価値説の原型」とも名付けたもののいくつかである。本稿の「はじめに」で番号をふって整理したものの中では、特に②-1 および③の点である。

この一国経済における生産活動の重要性、その際、労働が有している創造的な働きを重要視する、この点に関してマルクス・エンゲルスにおいてもやはり、そうした見解は引き継がれている。これがまず第一に認識しておくべき事項である。

その典拠について、以下との関連で重要であるため、すでに引き合いに出したマルクス・エンゲルスの文献の中から、いくつかを取り上げてみよう。

「資本は、労働がなければ、運動がなければ無である。」(Engels [1844] S.512./556 ページ。)

「生産のさいに主要なものであり、『富の源泉』であり、自由な人間活動である労働は、経済学者のもとではさんざんな目にあっている。」(Engels [1844] S.512./556 ページ。)

「労働は、なるほど彼の直接の生計の源泉ではあったけれども、同時にまた、彼の個人的な実存の確証でもあった。」(Marx [1844a] S.454./373 ページ。)

「国民経済学者によれば、もっぱらただ労働のみによって人間は価値を増大させるのであり、労働は彼の能動的な所有物であるのに、その同じ国民経済学によれば、地主と資本家のほうは、地主、資本家としてたんに特権的な、何の仕事もしないでいる神々にすぎないのに、どこでも労働の上に位して、彼に掟を押しつけるのである。」(Marx [1844a] S.476./395 ページ。)

「これらの諸固体を動物から区別するところの彼ら〔人間〕の最初の歴史的行為は、彼らが考えるというところにあるのではなくて、彼らが彼らの生活手段を生産しはじめるところにある。」(Marx-Engels [1845-46] S.21./17 ページ。)

「人間自身は彼らの生活手段を生産しはじめるやいなや動物とは別なものになりはじめる。」(Marx-Engels [1845-46] S.21./17 ページ。)

「それ〔労働力〕は、価値を創造する力であり、価値の源泉であり、しかも適当に取り扱えばそれ自身のもっている価値より大きな価値の源泉になるという、特別の性質をもっている。／そして、労働者階級だけがいったいの価値を生産するということ、これが、今日のわれわれの全社会の経済制度である。というのは、価値とは、労働ということ〔後略〕。(Engels [1891] S.598./584-585 ページ。)

本稿で示してきた既述の文献で関係する限りでも、以上の論述が見られる。

ベティ以来重視されてきた一国経済における生産活動の重要性、その生産活動の際、労働が有している創造的な働きを重要視する、こうした認識また観点は、マルクス・エンゲルスにおいてもやはり、上記のようにその見解は引き継がれているのである。これがまず第一に認識しておかなければならない事項である。

2. 唯物史観（史的唯物論）の原型

第二に認識しておかなければならないのは、さらにまた次の点である。

当該時期の 1840 年代後半、この頃からマルクス・エンゲルスの著作においては、すでに唯物史観（史的唯物論）に関する論述が非常に多くなってきている。唯物史観（史的唯物論）の論述に関しては、後の 1859 年に出版されていく『経済学批判』の「序言 (Vorwort)」があまりにも有名であり、それが特筆されるところである。が、しかし、それだけの認識把握でなく、彼らの著作を既述のように初期から追いかけていくと、唯物史観（史的唯物論）に関する論述は、すでに彼らが著作を始めた 1840 年代から早くも示されてくるのである。これに関して、以下確認していこう。

彼ら二人の著作を再び追うと、先のエンゲルスの「国民経済学批判大綱」(1844年)の後、マルクスにおいては『経済学・哲学手稿』(1844年)を著していく。その中では、エンゲルスの著作とは別な論点から従来の(国民)経済学への批判的検討を行ない、有名な労働者の疎外状況を提示している。またエンゲルスにおいてはその後、有名な『イギリスにおける労働者階級の状態』(1845年)を著し、当時の労働者の過酷極まりない状況を訴えた。

この後、表1で示した1840年代後半から彼らの代表的な文献において、早くも唯物史観に関する論述、あるいは唯物史観なりの歴史把握が見られてくるのである。その代表的なものを以下挙げるとすれば、次のとおりとなる。(詳しい引用は捨象しておく)

- ①『聖家族』(1845年)。これによる唯物論的な把握を嚆矢として、その後、
- ②「フォイエルバッハにかんするテーゼ」(1845年)。
- ③「ドイツ・イデオロギー」(1845年)。
- ④「一八四六年二月二八日付アンネンコフあてのマルクスの手紙」(1946年)。
- ⑤『哲学の貧困』(1847年)。
- ⑥「賃労働と資本」(1847年の講義、そして1849年の『新ライン新聞』への掲載)。

これらが特筆されるところである。

これらの中に、唯物史観(史的唯物論)に関する記述が早くからなされており、やがてそれらが後に有名な、先の『経済学批判』の「序言(Vorwort)」(1859年)へと結実していくと見ることができる。その片鱗のいくつかは、繰り返すが、①から⑥の文献においてすでに見られるのである。

この点もまたしっかりと認識しておきたい事項である。

3. 労働の創造性・有意義性、唯物史観(史的唯物論)、そして投下労働価値説との結実

本節ではここまでで次のことを確認しきった。1として、従来の経済学の観点を受け継ぐ形で、生産および労働の創造性・有意義性、これらの重視。そして2として、唯物史観(史的唯物論)の萌芽と展開。この二つが密接に折り重なり、さらに以下で見ていく3としてのリカードより提唱されていた投下労働価値説、これと融合・統合して結実していくのである。これが本稿で対象としてきた問題に対する解答であると筆者は考える。

繰り返すと、1800年代前半すでに様々な価値論が経済学において登場し錯綜していたその中で、なぜにマルクス・エンゲルスにおいては、当初注意を払っていなかったとも見られるリカード抛りの投下労働価値説に徐々に接近し、やがて『経済学批判』(1858年)と『資本論』(1867-90年)において、彼らの価値論として生産の中に投下される社会的・平均的人間労働量に価値を見る、簡単に言うなれば投下労働価値説を完成させていったのか。その解答である。

これについてさらに敷衍してみよう。本項上述の1・2・3は、以下のように見事に折り重なり合い、融合していく。

まず2で示した唯物史観(史的唯物論)⁽⁸⁾では、社会の下部構造を経済構造(ökonomische Struktur der Gesellschaft)に見る。その経済構造とは、生産力と生産関係の有り方である。一定の生産力水準や段階に応じて、それにふさわしい生産関係が取り結ばれる。これが根本・土台、つまり下部構造となつて、社会存続の基盤を形成している。このように、生産力とそれに対応して取り結ばれる生産関係こそを、唯物史観では経済構造と捉え、そして同時に、この経済構造こそが、何よりもまず社会存続の基盤、人間が存在していく実在的な土台(reale Basis)と捉え、これが家々等々の構築物(上部

構造）を支える下部構造を構築していくと捉えるのである。

この下部構造としての経済構造を土台・基礎にして家々が立つように、この上にその時代時代に即応した一定の上部構造が存立していき、一定の法律的・政治的の上部構造（Ein juristischer und politischer Überbau、また社会的意識形態 bestimmte gesellschaftliche Bewußtseinsformen）、具体的には制度、習慣、法律、道德、宗教、芸術、哲学、思想、他、これが形成され、存立していく。

こうした認識と把握に立てば、生活に必要な物質的な生産様式、つまりは下部構造、これこそが、社会的・政治的・精神的な生活過程一般を形作っていく基盤でもあって、また同時にそれらを制約するともいえる。

このように唯物史観（史的唯物論）では、社会の根本・土台、つまり下部構造を、その社会の経済構造、生産力と生産関係のあり方に求めていく。さらにその変化と発展のプロセスを導き出しているのだが⁽⁹⁾、その点はひとまずおいておくとして、本稿での設問との関連で重要なのは、次の関連性である。

唯物史観（史的唯物論）の観点では、何しろこのように、その時代の経済つまり生産力と生産関係のあり方に社会存立の根本を見ていくという観点からすれば、ここで重要な課題対象となってくるのは、その時代あるいは現代において、いかほどまたはどの程度の生産力がそこに備わっているのか、こうした事項である。これがまた、従来の経済学、すなわちペティ以来重視されてきた重要事項、（富の源泉に関して重要なのは、単なる商品交換・売買による差額代金の取得ではなく、一国経済における生産活動が有する有意義性であったこと、さらにその生産の際、唯一労働だけが有している創造的な働き、それを重要視するという観点、）つまり上記1として示した点、これらとまさに次のよう

に符合していく。

つまり上記唯物史観（史的唯物論）で一番の根本として重視した生産力や経済力、これを具体的に把握しようとすれば、当該期の社会経済において、唯一創造的な働きを有している労働および労働力が、既存あるいは付与された生産手段と有効的に連携して、いかほどの生産性を上げることができるのか、別言すれば、どの程度の生産力がその社会に備わっているのか、これが重要な対象事項となってこよう。そうした対象事項が、さらに簡単に言えば、すなわちどの程度の経済力がその社会にあるのか、これを意味することになってくるのである。

機械などの生産手段を用いながら、さらに唯一創造的な働きを有している労働力によって、いかなる生産性を遂行することができるのか、それがその社会における当該期の生産力であり経済力である。これがまさに2で示した唯物史観（史的唯物論）の観点からすれば、社会の根本・土台をなしている下部構造である。このように2で示した唯物史観（史的唯物論）の観点（社会の土台を生産力・経済力に見る観点）と、1で示した従来の経済学が重用視してきた観点（生産と人間の労働の重要性・有意義性）、この二つがかように折り重なり、融合・統合していく。

人間が行なう生産活動、そしてその際、人間の労働力こそが能動的な役割を果たしていくのである。機械などの生産手段は物であって、人間の手が加わらなければ基本的に形態変化はしない。自然現象で変化していくことはあっても、放置すれば劣化していくわけであって、しっかり商品なり使用に足りうるものとして仕上げるべく維持管理していくのは、人間の労働の果す役割である。こうした労働の果す役割、つまり生産活動において価値を高めたり、価値を創造させていくという役割を、労働という行為が能動的にかつ積極的に有している。さらにそうし

た創造的にして有意義な機能を行なうのは、唯一人間のなせる業、つまり人間の労働こそが所持している能力なのである。

こうしたペティ以来の経済学で受けつながられて展開されてきた生産と労働の創造的働きを重要視する観点が、さらにマルクス・エンゲルスによる唯物史観（史的唯物論）によって、生産・労働それを社会の根本・土台、つまり下部構造に見定めるという観点と、かように統合・符合し把握され展開されてきたわけである。既述の1・2の統合・符合とは、かような意味で言えるわけである。

さらに、そうした社会の経済力・生産力を、より具体的な数値指標と合わせて見ていくとすれば、どうなるか。当該時期において、ある物（例えば商品）はどのくらいの労働量で、つまりどのくらいの労働を投下・投入することによって、どのくらいの産出・生産が可能であるのか。（その際、無論、一商品を生産するために直接必要とされ、直接投下された労働量〔直接労働量〕だけでなく、その生産のためには機械等々の生産手段が必要であって、その生産手段をも生産するために必要とされた労働、これもまた間接労働として考慮していかなければならない。）これがまた次の重要な視点となってくるのである。

これこそが既述の3として示したリカード提唱の投下労働価値説と、まさにここで符合していくのである。

社会の経済力・生産力を、上記のようにより具体的な数値指標と合わせて見ていくために、当該時期において、ある物（例えば商品）はどのくらいの労働量で、生産が可能であるのか。つまり、どのくらいの労働を投下・投入することによって生産可能か、という問題対象は、その商品の生産にどのくらいの労働量が投下・投入されたのかという事項と、まさに表裏一体のことである。

これによって、その商品の生産にどのくらいの労働量が投下・投入されたのか、あるいはその商品の生産のためにどのくらいの労働を必要とするのか、という事項が重要な対象課題となってくる⁽¹⁰⁾。唯物史観が社会存立の根本・土台として、その時代の経済力・生産力に重要性を見たのと同様に、ある物を生産するためにどのくらいの労働量が必要か、どのくらいの労働量でそれが生産できるのか、ここに重要性（言うなれば価値）を見ていく「労働価値説」それも「投下労働価値説」の意義は、以上の関連性と連携の上で密接に成り立つのである。

再度まとめのため繰り返すが、以上1・2・3の密接なつながりこそが、様々な価値論・価値学説が登場していた中で、なぜにマルクス・エンゲルスにおいて、当初注意を払っていなかったとも見られるリカード抛りの投下労働価値説に徐々に接近し、やがて1800年代後半、彼らの価値論として商品の生産の中に投下される社会的平均的人間労働量に価値を見る、言うなれば投下労働価値説を完成させていったのか、その解答であると考ええる。

第3節 上記との関連で

本稿においては、上記の課題と解答だけでなく、その他にいくつかのことをすでに学んでいる。次のことを再確認したい。

産業革命の後、そして資本主義経済の成立後、時期的には本稿で対象とした1800年代前半において、労働者の状況は過酷を極めていた。それはエンゲルスの『イギリスにおける労働者階級の状態』（1845年）他においてかなり詳しく示されている。本稿でも当時の労働者階級の悲惨な状況として、簡単に、工場労働者の過酷な労働条件・労働環境、その下での労働者の退廃的な状況、劣悪な健康状態、周期的に襲う経済恐慌、その下での失業の憂き目とその悲惨な状

況、などと示した。

こうした労働者階級の状態と関連させて、前節 1・2・3 で示した観点、これらを本節では改めて対照させてみたい。

前節 1 で述べたように、人間が行なう生産活動、その際、人間の労働力こそが能動的な役割を果している点。商品なり使用に足りうるものとして仕上げるべく維持管理していくのは、人間の労働の果す役割であるということ。こうした労働の果す役割、つまり生産活動において価値を高め、富を創造させていくという役割を、労働という行為が能動的にかつ積極的に有している点。そうした創造的にして有意義な機能を行なうのは、唯一人間のなせる業、つまり労働こそが所持している能力であったこと。これを前節の 1 で示し、そのようなベティ以来受けつなされてきた生産と労働の創造的働きを重要視する観点が、さらに 2 として示したマルクス・エンゲルスの唯物史観(史的唯物論)によって、生産・労働それを社会の根本・土台、下部構造と見定められた。

さてそこで、こうした観点から見た場合、上記の労働者階級の過酷な状況というのは、どのように把握されるのであろうか。本来的に価値を高め、根源的に富を生産し創造させている労働者が、過酷な状況に陥っているという体制、これはどのように把握されるのか、ということもさることながら、是非とも改善していかねばならないという、規範そして命題にも似た課題が必然的に生まれてこよう。そこで、本稿でも若干示したマルクス・エンゲルス提示の社会革命の理論、その是非はおくとして、ともあれ既述の労働者階級の過酷な状況は改善し善処すべき理念や理論が生まれてくるわけであって、それは以上の背景や論理的な脈絡から理解できるところである。

この点を、後に現われ、そして今日主流派となっている経済学派、つまり新古典学派の分析

と、比較対照させて考えてみるとさらに興味深い。新古典派経済学の特徴そして特長として、いくつかある中で、次の点が特筆される。価値判断からは中立的な立場を採り、事実解明分析(positive analysis)の推進。全体として資源が有効活用されていない状態を社会的な損失とみなし、資源配分の無駄の解決や効率性の達成を目指す観点。こうした点がある。

それらはそれなりの長所を無論持つものでもある。ただし、こうした分析方法や観点のみに終始するとなれば、既述の労働者の状況というのは、過酷云々といった認識把握よりも、所与のもの、仕方がないもの、さらには社会的な効率性を高めるべきものであれば、必然的なもの・必要なもの、このような分析結果や評価ともなるのではなかろうか。加えて、かような事実解明分析に終始し、価値判断からは離れるとなれば、改善しなければならぬといった規範や命題は、対象外のものとして捨象され遺棄されよう。ここにこそ、新古典派経済学と本稿で今まで見てきた経済学との、大いなる違いが生じてくる源がある。

さらに、論題が飛躍するが対象を解りやすくするため、現代日本の近年の状況と合わせて考えてみよう。近年の労働者あるいは勤労者の状況は、1800 年代のものそのままではなく、労働運動他によって改善された面が多くある。がしかし、また共通する面も少なくない。特に近年の日本の問題とすれば、過酷な労働条件、長期の不況、雇用や生活不安を併せ持ちながら、非正規社員の累増、低賃金労働、低所得化、格差社会、これらの問題が取り沙汰されている。こうした日本の近年の状況は、単に市場の原理から必然的に生まれてきたという理解と処理の仕方ではなくて、前節 1・2 の観点からすれば、やはり倫理的意味合いをも込めて、改善させるべき重要な対象事項となってくるのである。

このように、前節 1 の新古典派以前の経済学

の観点、そして2として示した唯物史観（史的唯物論）の観点、さらに労働価値説の観点、これらは現代的にも意義あるものとして色あせることなく、以上のことを再考・検討させてくれるものである。温故知新とはかくあり、古典からそうした点を学び取りたい。

注

(1) 本文以下の諸点に関して、詳しい内容は深澤 [2015 a,b] [2016 a] を参照。

(2) なお、「投下労働価値説」「支配労働価値説」という分類・名称については、一応慣例に従って本稿でも用いている。そうした安直な対照的かつ二項対立的な把握は解りやすいものでもある。が、しかし逆に、誤解をまた生みやすいものでもある。例えば、投下労働価値説と言った時、その説には本文で示したような「生産された商品が持つ購買力」や、「生産された商品が交換の際支配・獲得できる他の商品生産の労働」、つまり支配労働価値説の重視する観点が全く意識されていないという、このような誤解を生みやすい。本稿で示していく投下労働価値説とは、支配労働価値説が重視する「生産された商品が持つ購買力」や、「生産された商品が交換の際支配・獲得できる他の商品生産の労働」を無視しているわけでは決してなくて、それを認めた上での主張である。

ちなみに、「労働価値説」と「効用価値説」という対照的把握も同様であって、労働価値説は商品が有する効用を無視しているなどという批判は正確なものでもなく、妥当するものでもない。（この点に関しては、深澤 [2010, 2015 a] を参照。）

(3) 同上。

(4) 例えば、Engels [1842 a,b] [1843 a,b]。

(5) なお、原典からの引用は、本文での引用の後、（原典ページ／和訳ページ）と、以下表記する。

(6) この点は、不破 [2015] 113 ページ以下からも

示唆を得た。

(7) 例えば、村田訳 [1956]。

(8) 唯物史観（史的唯物論）の基本的な整理と理解、および展開に関しては、深澤 [2016 b] を参照。

(9) これについても、同上を参照。

(10) これらの実証研究については、深澤 [2012]、泉 [2014] を参照。

参考文献

泉弘志 [2014] 『投下労働量計算と基本経済指標』大月書店。

深澤竜人 [2010] 「労働価値説（投下労働量分析）と自然・環境・使用価値との関係の検討—イムラー『経済学は自然をどうとらえてきたのか』の労働価値説批判への反論—」『山梨学院大学経営情報学論集』第16号。

—— [2012] 「投下労働量分析の発展と展開」（明治大学大学院政治経済学研究科 2011 年度博士学位請求論文）明治大学図書館・国立国会図書館。

—— [2015 a] 「労働価値説の源流の研究」『明治大学教職課程年報』No. 37。

—— [2015 b] 「フィジオクラシー（重農主義）の現代的意義の考察—F. ケネー『経済表』以前の著作から検討—」『えんとりびい』第77号。

—— [2016 a] 「1800 年代前半の価値論の展開について」『明治大学教職課程年報』No. 38。

—— [2016 b] 「投下労働量分析と唯物史観の統合」『山梨学院大学経営情報学論集』第22号。

不破哲三 [2015] 『マルクス「資本論」発掘・追跡・探求』新日本出版社。

Friedrich Engels [1839] “Briefe aus dem Wuppertal”, in *Karl Marx-Friedrich Engels Werke*, Band 1, Institut für Marxismus-Leninismus beim ZK der SED, Berlin, Dietz Verlag, 1957. フリードリッヒ・エンゲルス「ヴッパータールだより」（大内兵衛・細川嘉六監訳 [1959] 『マルクス＝エンゲルス全集』第1巻、大月書店）。

—— [1842 a] “Die inner Krisen”, *Ibid.*, Band 1. 同上「国内危機」（同上書）。

—— [1842 b] “Lage der arbeitenden Klasse in England”, *Ibid.*, Band 1. 同上「イギリスにおける労働者階級の状態」（同上書）。（なお、この論文は『ライン新聞』第359号に掲載されたもので、同名の有名な1845年の書籍のものではない。）

—— [1843 a] “Briefe aus London”, *Ibid.*, Band 1. 同上「ロンドンだより」（同上書）。

—— [1843 b] “Bewegungen auf dem Kontinent”, *Ibid.*, Band 1. 同上「大陸における社会改革の進展」（同上書）。

—— [1844] “Umriss zu einer Kritik der Nationalökonomie”, *Ibid.*, Band 1. 同上「国民経済学批判大綱」（同上書）。

—— [1847] “Grundsätze des Kommunismus”, *Ibid.*, Band 4, 1959. 同上「共産主義の原理」（前掲 [1960] 『マルクス＝エンゲルス全集』第4巻）。

—— [1891] “Zu : Karl Marx, Lohnarbeit und Kapital, Einleitung von Friedrich Engels zur deutschen Ausgabe von 1891”, *Ibid.*, Band 6, 1959. 同上「マルクス『賃労働と資本』一八九一年版へのエンゲルスの序説」（前掲 [1961] 『マルクス＝エンゲルス全集』第6巻）。

Karl Marx [1844 a], “Auszüge aus James Mills Buch Eléments „d’économie politique”. Trad. Par J. T. Parisot, Paris 1823”, *Ibid.*, Band 40, 1968. カール・マルクス「ジェームス・ミル著『政治経済学要綱』（J・T・パリゾ訳、パリ、一八二三年）からの抜粋」（前掲 [1975] 『マルクス＝エンゲルス全集』第40巻）。

—— [1844 b] “Ökonomisch-philosophische Manuskripte aus dem Jahre 1844”, *Ibid.*, Band 40. 同上「一八四四年の経済学・哲学手稿」（同上書）。

—— [1845] “Thesen über Feuerbach”, *Ibid.*,

Band 4, 1959. 同上「フォイエルバッハにかんするテーゼ」（前掲 [1963] 『マルクス＝エンゲルス全集』第3巻）。

—— [1846] “Brief von Karl Marx an P. W. Annenkow von 28. Dezember 1846”, *Ibid.*, Band 4, 1959. 同上「一八四六年十二月二十八日付アンネンコフあてのマルクスの手紙」（前掲 [1960] 『マルクス＝エンゲルス全集』第4巻）。

—— [1847] *Das Elend der Philosophie. Antwort auf Proudhons „Philosophie des Elends“*, *Ibid.*, Band 4, 1959. 同上「哲学の貧困 プルドンの「貧困の哲学」への返答」（同上書）。

—— [1849] “Lohnarbeit und Kapital”, *Ibid.*, Band 6, 1959. 同上「賃労働と資本」（前掲 [1961] 『マルクス＝エンゲルス全集』第6巻）。（村田陽一訳 [1956] 『賃労働と資本』大月書店〔国民文庫、新訳〕）。

—— [1859] *Zur Kritik der politischen Ökonomie*, *Ibid.*, Band 13, 1961. 同上『経済学批判』（前掲 [1964] 『マルクス＝エンゲルス全集』第13巻）。

—— [1867-1890] *Das Kapital, Kritik der politischen Ökonomie*, *Ibid.*, Band 23-25, 1962-64. 同上『資本論』（前掲 [1965-67] 『マルクス＝エンゲルス全集』第23-25巻）。

Karl Marx-Friedrich Engels [1845] *Die heilige Familie oder Kritik der kritischen Kritik*, *Ibid.*, Band 2, 1957. カール・マルクス・フリードリッヒ・エンゲルス『聖家族』（前掲 [1960] 『マルクス＝エンゲルス全集』第2巻）。

—— [1845-46] “Die deutsche Ideologie”, *Ibid.*, Band 3, 1958. 同上『ドイツ・イデオロギー』（前掲 [1963] 『マルクス＝エンゲルス全集』第3巻）。

—— [1848] *Manifest der Kommunistischen Partei*, *Ibid.*, Band 4, 1959. 同上『共産党宣言』（前掲 [1960] 『マルクス＝エンゲルス全集』第4巻）。